

## 8) ハイビスカス=(仏)桑華(ブツウゲ)

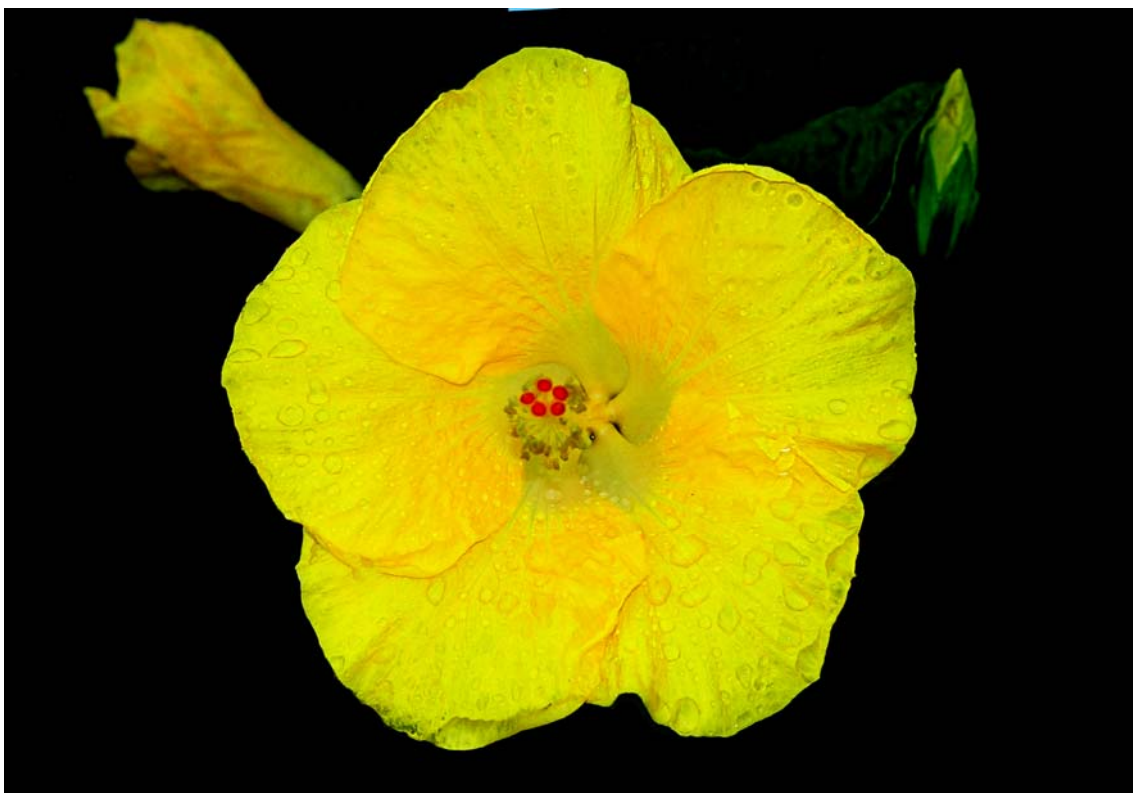
ハイビスカスはアオイ科の常緑小低木で、インド、東南アジア方面が原産地と考えられるがはっきりしない。高さは 5m 程になり、夏から秋にかけて、オレンジ色、赤色、黄色、ピンクなど色とりどりの大輪の花を咲かせる。花はラッパ状で一重咲の他、八重咲がある。熱帯地方ではどこでもごく普通に見られる。日本では沖縄から九州、四国の温暖地に限られており、摂氏 5 度以下になると越冬は難しい。このため通常は鉢で育てて、冬期は室内に取り込んで育てる。また温度が下がると落葉するが、暖かいところでは一年中花を咲かせる。和名の扶(仏)桑華の由来は、漢名の扶桑もしくは仏桑に華という一字を加えたものである。「扶桑」とは南方に産する木のことで、『山海経』(サンガイキョウ)によれば、中国の東方、日の出るあたりの海中にあるといわれる神木である。これはその方角から見ると日本にあたり、この時代には未知の国日本に関して、とかく過大な期待や幻想を抱いていたことが窺える。また仏桑華の方は、菩薩花(ボサツバナ)ともいわれるために、仏の文字が与えられたのだろう。琉球では死者の冥土での幸福を願い、墓地の周辺などにハイビスカスがよく植えられている。学名は『*Hibiscus rosasinensis*』で、属名はゼニアオイ属の大型花を意味しており、種小辞はこの花の命名者であったリンネが、中国原産と勘違いしたために『中国のバラ』としたことに由来する。このためイギリスでも『rose of China』『Chinese hibiscus』と呼ばれており、ヨーロッパではとかく美しい花には『Rose』と名付けることが多い。これは夾竹桃のところでも見てきた通りで、後述する芙蓉も同様である。

さてハイビスカスが日本に伝わったのは、17 世紀の初めごろのこととされ、まず扶桑華として琉球に伝わり、これを島津藩が入手したものと思われる。『博物全書』には、1614 年(慶長 19 年)に時の島津藩主であった島津家久が、マツリカの花とともに、ハイビスカスを徳川家康に献上したことが記されている。当時この花は日本人にとっては、それほど価値のある花だったのである。この年は『大阪冬の陣』の年にあたり、家康も 70 歳代になっていたことからすると、マツリカやハイビスカス如き植物が、天下の将軍様への献上品として、通用するはずもないように思えるのだが、これが実は献上品としての役割を十分に果たし、家康に大層好まれたと伝えられている。というのは家康もその子の秀忠も、また孫の家光も徳川 3 代の将軍は、無類の植物愛好家だったからである。さらに 5 代将軍で、かの『生類憐みの令』を出した綱吉は、これに輪を掛けた生き物好きだった。実はこれが高じて『生類憐みの令』となったのだが、この『令』は今様にいえば『動物愛護』であって、後の時代に非難されるほどの悪法ではなかった。ただこの『令』を運用する側の理解不足から、しばしば不都合が生じたことは事実である。とは言えこの時代の下級官吏に動物愛護なる精神が理解できるはずもなく、最初から無理があったことは否めないだろう。

ともあれこの様な時代を背景に、諸大名は幕府に取り入るために、珍しい植物を格好の貢ぎ物としたのである。しかもこの風習は諸大名のみならず、下級武士や町人まで見習ったから、元禄時代には多くの新品種も開発され、日本はさながら園芸大国といえるほどになった。水野元勝が『花壇綱目』を出版し、中村用惕斎が『訓蒙図彙』(クンモウズイ)を著わしたのも、さらには貝原益軒が『花譜』や『菜譜』『大和本草』を出したのもこの時代で、伊藤三之丞が『花壇地錦抄』を出版したのも同じ時代だった。この他にも『増補地錦抄』『公益地錦抄』『和漢三才図絵』『日本釈名』『東雅』など、上げていったらきりが無い。またこの時代は単に書物だけが先行したわけではなく、縁日には近郷の植木屋が、立派な鉢に入った盆栽や苗木を並べ、はたまた天秤に担いで江戸市内を売り歩く姿がよく見受けられた。「粋な黒堀見越しの松」ではないが、大名の江戸屋敷はもとより、旗本や大店の旦那の家でもよく庭が整備され、松や柘(ツゲ)、鶯(モチ)木斛(モッコク)、さらには梅や桜などの花木の他、椿や牡丹といった庭木が植え込まれ、当時日本に来たオランダ人も、江戸の佇まいはヨーロッパでは見られないほど美しい街であると賞賛したほどであった。この江戸の佇まいは今でも麻布や麴町、本郷、高輪などのいわゆる屋敷町と言われるところに残っており、往時を忍ぶことができる。しかしこのような町人文化が大輪の花を開くことができたのは、天下泰平という時代的な追い風と、幕府も諸大名も、旗本も御家人も町人も、はては長屋のクマさんやハツァンにいたるまで、お互いに共有できる『花』という一つの『価値』を持つことができたからと見ることもできよう。これがなかったら元禄文化全体が、もっと早く挫折していたに違いない。この点で園芸植物の果たした役割は、多大なものであったというべきだろう。

さて話を元のハイビスカスに戻すとしよう。幕末の1827年に出版された園芸書『草木奇品家雅見』(ソウボクキヒンカガミ)にはこの花が紹介されており、斑入りの品種があったことが記されている。またハイビスカスがヨーロッパに伝わったのは、1731年のことで、前述のごとくリンネは中国原産と勘違いしたのだが、16世紀に中国で刊行された『閩書南産誌』(ビンシヨナンサンシ)には、外国から渡来したもので、中国には産しないと記されている。

ハイビスカスの品種改良はハワイを中心に行なわれてきた。現在では5,000種以上が知られており、今も増え続けている。V.S.ホルト氏は一人で500種ものハイビスカスを改良したといわれている。ハイビスカスは丈夫な木であるからどこでもよく育つ。繁殖は挿し木で良く発根するので、平均気温が20度を越えたら鉛筆ぐらいの小枝を挿しておくが良い。冬場は室内に取り込まなければならない。春先アブラムシがどこからともなく湧いてくるので、こんなときには噴霧器で牛乳を散布するとよい。しかしあまり増えてからでは対応できないので、植物の病虫害は常に早めに対処することが大切である。



ハイビスカスは、いかにも南国的で色鮮やかな花を咲かせてくれるが、残念なことに朝開いて夕刻にはしおれてしまう一日花である(埼玉県深谷市)。



ハイビスカスの花(埼玉県深谷市)



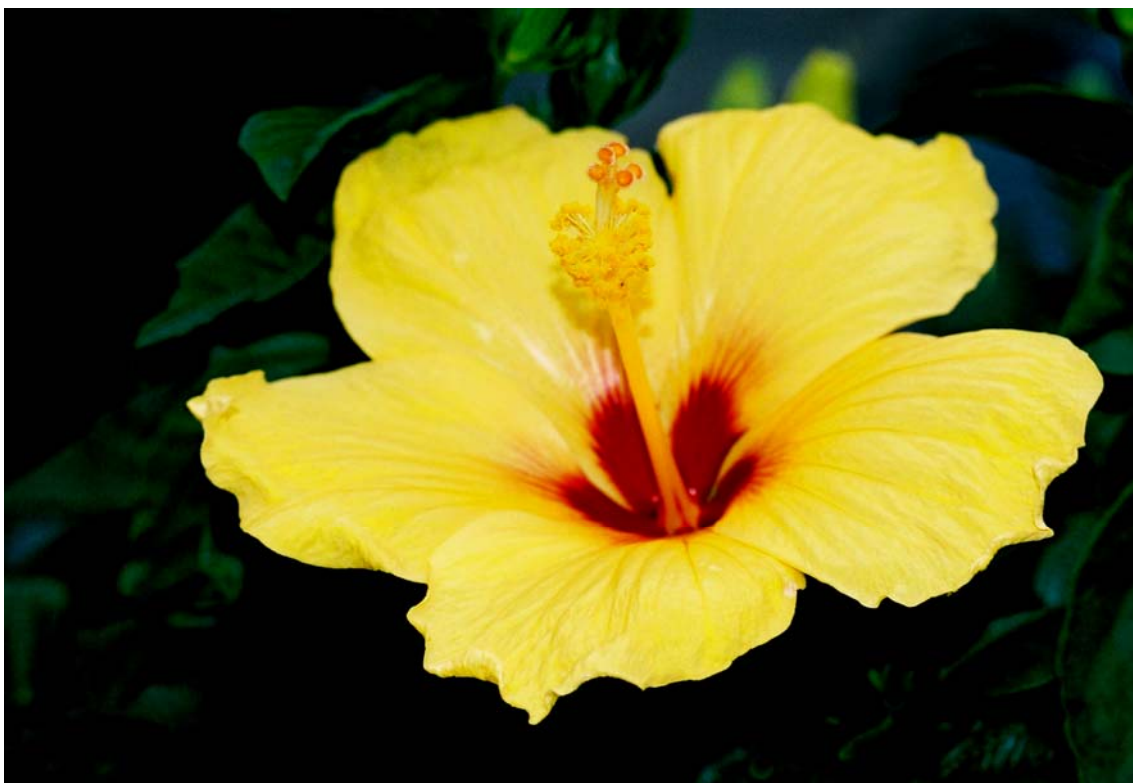
ハイビスカスの繁殖は挿し木である。しかし夏が終わるまでに根をしっかりと張らしないと、冬を越すことが出来ない。出来ればお彼岸ごろに少し加温して挿すとよい(埼玉県深谷市)。



ハイビスカスの花は冬に寒がるので露地での越冬は難しい(埼玉県深谷市)。



ハイビスカスの花は、ほとんどの色彩のものがそろっているといっても過言ではない。ないものはブルー系統と紫ぐらいだろうか(埼玉県深谷市)。



この花は同じ黄色でも底紅になっている(埼玉県深谷市)。



このハイビスカスは珍しく雄蕊が花弁化して2段咲に見える(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)